

状態化形式のテンスについて

—韓国語との対照の観点から—

許 宰 碩

キーワード：動き、変化時点、完了持続性、状態化形式、認識想定区間、同時関係

要 旨

日本語の「タ」は動きの変化時点が発話時以前であることを表わすのに対し、「テイル」は発話時に捉えられる状態を表わすとみる。そのため、日本語の「タ」は発話時に持続する状態を表わすことができない。それに対し、韓国語の過去形「eoss」は「完了持続性」を有しており、現在の状態や未来の状況も表わすことができる。また、日本語の「テイル」に対応する韓国語は通常、結果状態には「eo issda」、進行状態には「go issda」であるが、他動詞の場合には「go issda」が結果状態を表わすこともできる。これは、「go issda」が動作パーフェクトを表わしうることと結びつく。本稿では、特に韓国語の過去形「eoss」と進行形式「go issda」との関係に注目しながら、「eoss」が日本語の「タ」とは異なり、状態化形式と似たような働きをするのは、中世韓国語の「eo issda」の「完了持続性」をまだ保持しているからであると捉える。

1. はじめに

<問題1>

日本語と韓国語のアスペクト形式は類似しているといわれるが、実際はかなりの相違がみられる。日本語のばあい、「シテイル」が結果状態や進行状態を表わすが、韓国語は、主として結果状態は「eo issda^{*1}」、進行状態は「go issda」で表わされる。しかし、(1)のような文においては「go issda」が現在の結果状態を表わす一方で、過去形「eoss」も「go issda」と同様に用いられる。

*1 本稿の韓国語は文化観光部のローマ字表記法に則る。www.ganada.org

(1) (だれかを尾行している。電話で同僚に彼女の格好を知らせる)

a. 彼女は着物を{着ている/*着た}。

b. 그녀는 기모노를 {입고 있어/입었어}.

(geunyeoneun gimonoleul {ibgo isseo/ibeosseo}.)

<問題 2 >

日本語の「タ」は進行状態を表わすことができないが、韓国語は「go issda」のみならず、「eoss」も進行状態を表わすことがある。このことは、(1)のような再帰表現と相通じるところである。

(2) (先生に手紙を書いているところ、姉から「さっきから何をやっているの?」と聞かれて)

a. 手紙を{書いている/*書いた}。

b. 편지를 {쓰고 있어/썼어}.

(pyeonjileul {sseugo isseo/ sseosseo}.)

<問題 3 >

さらに、日本語は、「テイル」が進行状態、結果状態、動作パーフェクトを表わすが、韓国語は、「eo issda」ではなく、「go issda」がごく限られた形で動作パーフェクトを表わす。

(3)a. 田中は自分の日記の中で次のように書いている。

b. 타나카는 자신의 일기에서 다음과 같이 쓰고 있다.

(Tanakaneun jasinui ilgieseo daeumgwa gati sseugo issda.)

<問題 4 >

韓国語の「eoss」は「go isseosdda」と同様に、過去の状態を表わすことが可能であり、日本語の「タ」と大きく異なっている。

(4) (会社から帰ってきた夫がベルを何回も鳴らしても出て来ない。しばらく経った後で、妻がドアを開けると、夫から「何してた?」と聞かれて)

a. 食事の支度を{してたの/*したの}。

b. 식사 준비를 {하고 있었어요/했어요}.

(sigsa junbileul {hago isseosseoyo/haesseoyo}.)

本稿では、韓国語の過去形「eoss」の振る舞いに注目しながら、両言語の状態化形式の類似性と相違点を明らかにしたい。特に、(1)(2)の「eoss」、あるいは(1)(3)の「go issda」はまったく別のものではなく、連続しているものと考えられる。このような前提をもとに、まず、2節では日本語の状態化形式「テイル」の意味について述べ、3節では、日本語の「テイル」に韓国語の過去形「eoss」や「go issda」が対応する現象について検討する。4節では、(4)のように「テイタ」に「eoss」が対応する現象を考察し、5節では、未来の状況を表わす「eoss」について述べる。

2. 「テイル」の意味と機能

日本語の「テイル」には進行状態、結果状態、単純状態、経験・記録、繰り返しなどの五つの意味があると指摘されているが、本稿では、進行状態、結果状態、経験・記録に限って述べる。奥田(1978)は「テイル(テイタ)」は「スル(シタ)」との対立概念として捉え、継続相と名づけている*2。しかし、野村(2004)が指摘しているように、継続相という名づけには問題がある*3。たとえば、「向こうに人が倒れている」と言った場合、「倒れる」動きは発話時以前であるから、継続相でなく、完成相であると見られる。そこで、本稿では、金水(1994)にならって、「テイル(テイタ)」を状態化形式*4とし、継続相という概念は用いない。「テイル」は状態性を保持しており、

*2 奥田(1978)は完成相「スル(シタ)」との対立概念として継続相を挙げ、アスペクトは両者の対立として捉えるべきであると主張し、既存の研究が継続相に傾いていると批判している。

*3 野村(2004)は、ロシア語動詞のアスペクチュアルな対立形式は普通「完成相・不完成相(パーフェクティブ・インパーフェクティブ)」などと呼ばれるとし、完成相では動詞の表す動作は完結・完了・完成しており、不完成相では進行しているとする。野村は結果状態やパーフェクトは不完成相であるはずがないとし、かつ「継続相」でも「完成相」と対立する概念を作らないと述べている。

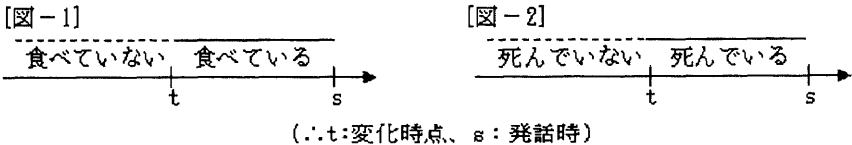
*4 金水(1994)は、状態化形式について動詞のテ形や連用形に存在動詞が膠着した形態として分析し、継続相やパーフェクト相などの用法をもつものであるとしている。これに従うと、「テアル」形も状態化形式であるが、「テアル」については稿を改めて論じたい。

状態性を有していない「スル(シタ)」とは明らかに異なっている。状態性の有り無しは両者の相違を捉えられる重要な手がかりである。(5)(6)を見られたい。

- (5) 太郎はご飯を食べている。
 (6) 太郎は死んでいる。

(5)は進行状態、(6)は結果状態を表わす。本稿では、進行状態であろうが、結果状態であろうが、「テイル」の意味は発話時現在の状態を表わすと捉える。「タ」はシテイナイ状態とシテイル状態との切り替えの時点、すなわち変化時点が発話時以前(=過去)であることを表わすだけで、変化時点以後の状態には関心がない。それに対し、「テイル」は変化時点以後(のある時点から)の状態が発話時まで持続することを示す働きをされると考えられる。要するに、「タ」は状態性を含んでおらず、状態性を含んでいる「テイル」と対立しているのである。

本稿では、基本的に「タ」は過去、「テイル」は現在の状態を表す形式であると捉える*5。[図-1][図-2]はそれぞれ(5)(6)を図式化したものである。



(5)(6)は現在の状態を表わすのであるが、必ずしも変化時点(t)以後から発話時(s)現在までの状態を捉えているとは限らない。たとえば、(5)は「太郎がご飯を食べていない」時点から捉えていれば、変化時点以後から発話時までの状態を捉えているといえる。一方、学食でご飯を食べている太郎を偶然見つけて言う発話なら、変化時点以後のある時点から発話時までの状態を表わすことになる。後者の解釈は話者が変化時点を直接捉えているわけではない。しかし、たとえこの解釈が変化時点をつまていないとしても、「食べていない」状態から「食べている」状態への変化時点が

*5 「テイル」が未来時に使われることもある。例えば、「確かに明日の今頃にはレポートを出しているよ。」のばあい、発話時以後の状態を表わしている。これは工藤(1995)の未来パーフェクトに該当するものであるが、未来の状況を表わし得る点においては状態動詞「アル・テイル」と同様である。

常に存在するのは否めない。本稿では、(5)(6)は変化時点を前提にして現在の状態を表わす点において共通していると考えたい。

(7)はいわゆる経験といわれる文である。(7)は動き全体が発話時以前に成立しているため、出来事時は過去である。

(7) 山田さんは3年前に結婚している。

これと関連して、工藤(1995)は、(7)を動作パーフェクトとし、出来事時は過去、設定時(=発話時)は現在であると述べている。動作パーフェクトとは、設定時において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力を持っているということである。本稿では、動作パーフェクトの「テイル」も依然として現在の状態を表わしていると判断する*6。ただし、動作パーフェクトの用法は動き全体が発話時以前に成立したという点において結果状態と同様であるが、「テイル」の状態性は結果状態より抽象的である。つまり、(6)(7)は動き全体が発話時以前に終わっている点においては共通しており、その動き以後の状態の性質は異なっているのである。(6)(7)の「テイル」は存在動詞「イル」「アル」と同様に、状態性を有しており、現在の状態を表わすことができるが、「テイル」の状態が動きの完了によるものであるという点においては「イル」「アル」と異なっている。一方、韓国語の「eo/go issda」は(7)のような抽象的な状態を表わしにくいことから「テイル」と対照的である。

次に、「テイタ」について見てみよう。「テイタ」は「テイル」に「タ」がついた形式であって、発話時以前の状態を表わす。

(8)A：今日、田中君を見た？

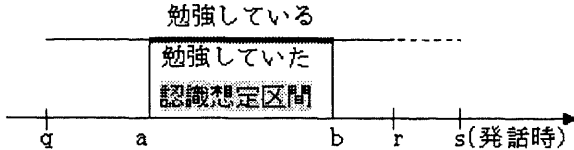
B：うん、さっき、図書館で勉強してたよ。

(8)は「図書館で勉強している」状態が「タ」によって過去の状態になっている。基本的に「テイタ」は発話時以前のある時点において捉えられた状態を表わすものであ

*6 岩崎(2000)は、パーフェクトは結果状態の一バリエーションとして認められるべきもので、結果状態と別に設定することは、結果状態との類似性を捉える上で、逆にさまたげとなるとしている。たとえば、「太郎は三年前に一度京都を訪れている」といういわゆる現在パーフェクトは、「三年前に」は「訪れ+てい+る」の「訪れ」の部分に係ると述べている。

る。(8)の「勉強していた」には二つの読みが可能であって、一つは「田中が今は図書館で勉強していない」であり、もう一つは「田中が今も図書館で勉強している」である。(8)を図式化すると、[図-3]になる。

[図-3]



前者の解釈は[r-s]区間が実現しないが、後者は実現していることになる。このように、状態述語の「タ」形は、その状態が発話時まで持続するか否かについて無標であるようである。[r-s]は文脈的な状況が整えば、実現可能である。一方、話者Bは「勉強している」状態をすべて把握しているのではなく、[a-b]区間だけを把握しているのである。本稿では、話者が捉えている状態の区間を「認識想定区間^{*7}」と呼び、一連の状態から取り出すことができると判断する。(9)を見られたい。

(9) (隣の家に赤ちゃんが生まれたと聞き、お祝いに行ってきた夫と話す)

夫：誰に似ている？

妻：お母さんに似ていました。

(9)の「似ている」状態は当然発話時現在にも有効である。にもかかわらず、「似ていた」といえるのは、「認識想定区間」が発話時以前に存在するからであろう。(10)を見られたい。

*7 これは、金水(2001)の「部分的期間」とも相通じるものと考えられる。金水は、発話時現在を含むことによってアルを適切とする状態があるとき、その状態の継続期間のうち、発話時現在以前の部分(部分的期間)を取り出すことによって、必ずアツクも適切となる(部分的期間の定理)と指摘し、<回想><関連づけ>として整理した「タ」形の用法はこの部分的期間の定理によって可能であるという。ただし、「認識想定区間」はその状態全体を表わすことができる。

- (10) (会社から帰ってきた夫がベルを何回も鳴らしても出て来ない。しばらく経った後で、妻がドアを開けている場面)

夫：何してたの？

妻：着替えてた。

(10)は、発話時以前に「着替えている」状態が終わっているが、動きの主体が話者自身であるため、(8)とは異なり、その状態全体が捉えられやすい。[図-3]からすれば、「q-r」区間、すなわち「着替えている」状態全体が「認識想定区間」になり、発話時以前に位置づけられているから、「着替えていた」にしなければならない。「着替えていた」を「着替えた」に言い換えれば、非文になってしまうが、これは「着替えた」が「着替えていない」状態と「着替えている」状態との切り替えの時点(=変化時点)が発話時以前であることを表わし、「状態性」を保持しなくなってしまうからだろう*8。

3. 日本語「テイル」：韓国語「go issda/eoss」

3.1. 結果状態

韓国語では主に他動詞のばあい、結果状態を表わす形式として「eo issda」ではなく、「go issda」が用いられる。(11)はその一例である。

- (11) (だれかを尾行している。電話で同僚に彼女の格好を知らせる) (= (1))

a. 彼女は着物を{着ている/*着た}。

b. 그녀는 기모노를 {입고 있어/입었어}.

(geunyeoneun gimonoleul {ibgo isseo/ibeosseo}.)

(11)はいわゆる再帰表現であるが、「go issda」だけでなく、「eoss」も用いられる。李基甲(1981)によると、少なくとも16世紀半ばには(11)のような再帰表現に「nibgo i

*8 たとえば、「私は3時から5時まで図書館で勉強していた」のように、時間設定をすると、「図書館で勉強する」動きの全体量は「2時間」であり、「今は勉強していない」という意味になるだろう。「勉強した」に言い換えれば、「2時間勉強していない」状態から「2時間勉強している」状態の変化時点が発話時以前であることを表わすため、「勉強していた」のような状態性は保持しなくなり、「認識想定区間」は存在しないことになるだろう。

sda(넙고 있다)」と「nibeo isda(니버 있다)」の二種類の状態持続があることを指摘している。「nibeo isda (니버 있다)」は「nibeosda(니벗다) > ibeossda(입었다)」に変化するのだから、(11b)は歴史的な変化を反映しているといえる。結局、(11b)は「eoss」が「完了持続性^{*9}」を保持していることを裏付けていると考えられる。次の二例も再帰表現である。

- (12)a. 太郎は目を{閉じている/*閉じた}。
 b. 타로오는 눈을 {감고 있다/감았다}.
 (Talooneun nuneul {gamgo issda/gamassda}.)
- (13)a. 太郎はネクタイを{締めている/*締めた}。
 b. 타로오는 넥타이를 {매고 있다/맸다}.
 (Talooneun negtaileul {maego issda/maessda}.)

一方、日本語の「タ」は現在の状態を表わすことができない。先にも述べたように、日本語の「タ」はシテイナイ状態とシテイル状態との切り替えの時点が発話時以前であることを示しており、その変化時点以後の状態には関心がない。(11)の「着た」が不自然なのは、「着ていない」状態と「着ている」状態との切り替えの時点が発話時以前であることを表わすだけで、「着ている」のような状態性は保持していないからである。このことは韓国語の過去形「eoss」との大きな違いである。

「go issda」と「eoss」の対応関係は再帰表現のほか、次のような用例からも確認できる。これは、「eoss」が次節の進行状態にも用いられる現象と無縁でないことを示していると考えられる^{*10}。

*9「完了持続性」とは、完了性と状態性を合わせて命名したもので、中世韓国語の「eo isda」から変化してきた現代韓国語の「eoss」に「eo(完了)+isda(状態)」の性質がまだ影響していることを示唆すると考えられる(김종태(1987)、송창선(2001)参照)。この「eoss」の完了持続性が弱まると、過去の「eoss」になると考えられ、この二つの「eoss」の間にはある程度連続性が認められる。一方、日本語の主文末の「タ」は完了性や状態性を失って過去テンスマーカーとして働いていると考えられる。

*10 (14)~(18)は森山(1988)の「維持」とその周辺のなものであるが、再帰表現の(11)と連続線上にあり、典型的な進行状態の「go issda」と結果状態の「go issda」との架け橋的な役割を果たしていると考えられる。

- (14) (友だちと図書館の入り口で会うことにして行ってみたら、手に何かを持っている)
- a. 手に何を{持ってるの/*持ったの}?
- b. 손에 무엇 {들고 있니/들었니}?
- (sone mueol {deulgo issni/deuleosni}?)
- (15) (バスに乗って約束場所に行く途中、友達から電話がかかってきて「今何に乗っているの?」と聞かれて)
- a. バスに{乗っている/*乗った}。
- b. 버스를 {타고 있어/탔어}.
- (beoseuleul {tago isseo/tasseo}.)
- (16) (友達に会ってコーヒーを飲んでいるとき、お母さんから電話がかかってきて「今何をやっているの?」と聞かれて)
- a. 友達に{会ってる/*会った}。
- b. 친구를 {만나고 있어/만났어}.
- (chinguleul {mannago isseo/mannasseo}.)
- (17) (太郎を待っているうちに、偶然同級生に会う。その同級生から「誰を待っているの?」と聞かれて)
- a. 太郎を{待ってる/*待った}。
- b. 타로오를 {기다리고 있어/기다렸어}.
- (Talooleul {gidaligo isseo/gidalyeosseo}.)
- (18) (「今、上演している演劇の主演はだれ?」と聞かれて)
- a. 太郎がこの演劇の主演を{演じている/*演じた}。
- b. 타로오가 이번 연극의 주연을 {맡고 있어/맡았어}.
- (Talooga ibeon yeongeugui juyeoneul {matgo isseo/matasseo}.)

(14)～(16)は結果状態、(17)(18)は進行状態に近いものである。この5例も、「eoss」が用いられることから、再帰表現との類似性が認められる。これらは、典型的な結果状態と進行状態との中間的なものであり、「eoss」が次節の進行状態に用いられる現象と、ある程度連続していることを示唆すると考えられる。

一方、結果状態の「go issda」は動きの過程に注目するような文脈においては進行状態を表わす。このように、「go issda」が結果状態を表わすか進行状態を表わすかは文脈によるものであり、進行状態のばあい、通常「eoss」形は不自然になるので

ある。

(19) a. 太郎は今テレビを{見ている/*見た}。

b. 타로오는 지금 텔레비전을 {보고 있다/* 봤다}.

(Talooneun jigeum tellebijyeoneul {bogo issda/* bwassda}.)

3.2. 進行状態

韓国語では、通常進行状態が「go issda」で表わされる。(20)は典型的な進行状態の用例である。

(20) a. 太郎は今ご飯を食べている。

b. 타로오는 지금 밥을 먹고 있다.

(Talooneun jigeum babeul meoggo issda.)

しかし、(21)(22)のように、現在の進行状態を表わす文においても韓国語の「eoss」が用いられることがある。

(21) (部屋で宿題をしているところ、友人から電話がかかってきて「今、何やっているの?」と聞かれて)

a. 宿題を{してる/*した}。

b. 숙제를 {하고 있어/했어}.

(sugjeleul {hago isseo/haesseo}.)

(22) (先生に手紙を書いているところ、姉から「さっきから何をやっているの?」と聞かれて) (= (2))

a. 手紙を{書いている/*書いた}。

b. 편지를 {쓰고 있어/썼어}.

(pyeonjileul {sseugo isseo/sseosseo}.)

(21)(22)は「go issda」とも「eoss」とも言い表せる表現である。これは、日本語が「テイル」しか用いられないこととは対照的である。これと関連して、井上・生越・木村(2002)は動作自体の完結の有無とは別に、一定時間が経過して、気持ちの上で一区切りついたところで総括をおこない、発話時までの過程を一つのまとまりとして非状態形、すなわち「eoss」で叙述できると述べているが、本稿では、「eoss」が

進行状態を表わすことができるのも結局「完了持続性」を保持しているために生じる現象であると考えたい。この「完了持続性」があるからこそ、進行中の動きが完了したかのように言えるのではないだろうかと考えられる。形態的に、(21)(22)は(11)と相通じるところである。歴史的な観点から見ると、現代韓国語の「eoss」は「eo isda > es > eos > eoss」のような変化過程を辿るが、「eo isda」の「完了持続性」をまだ保持していると捉えられる。従って、「go issda」と「eoss」は状態性の観点からは同様であるが、完了性の観点からは異なっているといえそうである。(21)(22)が成立するのは、このような歴史的な変化を反映しているためである。

一方、現代韓国語の「eoss」はその状態が発話時以前から持続していると見られる文脈が整うばいに限られるようである。たとえば、(21)(22)は「電話がかかってくる以前から」「さっきから」のような文脈が読み取れることから、「eoss」が用いられる。このような文脈的な条件が整っていない(20)は「eoss」にすると、進行状態を表わせなくなってしまう。

3.3. 動作パーフェクト

現代韓国語の「go issda」は、結果状態や進行状態のほか、動作パーフェクトを表すことがある。

- (23)a. 田中は自分の日記の中で次のように書いている。 (=(3))
b. 타나카는 자신의 일기에서 다음과 같이 쓰고 있다.
(Tanakaneun jasinui ilgieseo daeumgwa gati sseugo issda.)
- (24)a. 検察関係者らは次のように述べている。
b. 검찰 관계자들은 다음과 같이 말하고 있다.
(geomchal gwangyejadeuleun daeumgwa gati malhago issda.)
- (25)a. ニカラグアに対する財政支援を中断させようとしているという話を聞いている。
b. 니카라과에 대한 재정 지원을 중단시키려고 한다는 이야기를 듣고 있다.
(Nikalagwae daehan jaejongjiwoneul jungdanskilyeogo handaneun iyagileul deud go issda.) (kaist-195)
- (26)a. 著者はこの本の中で世界の風習を詳細に説明している。
b. 저자는 이 책에서 세계의 풍습을 상세히 설명하고 있다.
(jeojaneun i chaegeseo segyeui pungseubeul sangsehi seolmyeonghago issda.)

動作パーフェクトの「go issda」は、「書く」「述べる」「聞く」「言う」「話す」「説明する」など主として言語活動を表わす動詞に見られる。しかし、これは、小説の「地の文」や新聞、講義、ニュースなど、書き言葉的な性質が強いため、会話においては用いられにくいようである。(27)を見られたい。

(27)a. だれがそんなこと言ってるの?

b. 누가 그런 말 {??하고 있어/했어}?

(nuga geuleon mal {??hago isseo/haessco}?)

(27)は会話文であるため、「go issda」が用いられず、過去形「eoss」が用いられる。このように動作パーフェクトの「go issda」は日本語の「テイル」より使用領域がかなり限られるのである。このことは、安(2000)が指摘したように、「go issda」には存在動詞「issda」の語彙的な意味がまだ強く残っており、動作パーフェクトのような抽象的な状態を表わしにくいからではないかと考えられる。

一方、堀江(2003)は、最近の文法化の研究では、世界の言語において、動詞や名詞といった内容語が、アスペクトを表す文法形式に文法化する際にいくつかの言語普遍的な経路を辿ることが明らかにされてきているとし、パーフェクトを表わす文法形式が辿る文法化の経路の典型的なものの一つとして(28)を挙げている。

(28) 'be' / 'have' → RESULTATIVE → ANTERIOR → PERFECTIVE/SIMPLE PAST
 (結果相) (パーフェクト) (完結相/単純過去)

堀江は「進行相」を中心的に表わす「go issda」のような形式がパーフェクトの意味を獲得するという文法化の経路は、類型論的によく知られている(28)のような、パーフェクトの意味的経路に合致しない興味深いケーススタディを提供すると述べている。

しかし、現代日本語の「テイル」が果たして(28)のような経路を辿っているのかについてはよく分からない。さらに、現代韓国語の動作パーフェクトの「go issda」が必ずしも進行相から派生したとは思えない。李基甲(1981)、鄭彦鶴(2002)は、「go issda」の通時的な変化を捉えているが、15・16世紀の「go issda」の用例を見ると、少数であり、かつ結果相と反復相しか見られない。鄭彦鶴(2002)は、「go issda」の進行相は18世紀ごろから現れ始めると指摘している。本稿では、反復相から進行

相が派生し、結果相から動作パーフェクトが派生していると推定する。現代韓国語の「go issda」は(29)～(31)のように、他動詞に接続して結果状態を表わすことができる。

(29)a. 花子はその事実を知っている。

b. 하나코는 그 사실을 알고 있다.

(Hanakoneun geu sasileul algo issda.)

(30)a. 太郎は3時間前から窓を閉めている。

b. 타로오는 3시간전부터 창문을 닫고 있다.

(Talooneun 3siganjeonbuteo changmuneul dadgo issda.)

(31) (ニュースの時、記者がヘリから赤く染まっている山を眺めながら言う場面)

a. 紅葉が山全体を赤く染めています。

b. 단풍이 온 산을 붉게 물들이고 있습니다.

(dangpungi on saneul bulgge muldeuligo issseubnida.)

岩崎(2000)は、「テイル」のパーフェクト性を結果状態の一バリエーションとして捉えているが、このような捉え方は韓国語の「go issda」にも当てはまるだろう。結果状態と動作パーフェクトは、状態の性質は異なっているものの、動き自体が発話時以前に終わっており、その結果状態が発話時に持続していることから連続性が認められる。それに対し、進行状態は動き自体がまだ終わっていないので、動作パーフェクトとの連続性は認められにくい。堀江は形式的な観点から動作パーフェクトの「go issda」を進行相から派生したものとしているが、結果相から派生したものとしたほうが動作パーフェクトとの連続性を捉えやすいのではないかと考えられる。

一方、使用領域は限られているものの、現代韓国語の「go issda」が動作パーフェクトを表わし得るとするのは、「go issda」の文法化が進行中であることを物語っていると考えられる。

4. 日本語「テイタ」：韓国語「go isseosdda/eoss」

日本語の「テイタ」には、(32)のように韓国語の「go isseosdda」と「eoss」が対応することがある。

(32) (偶然、学校の前の居酒屋で酒を飲んでいる太郎を見つけたが、声をかけずに、

家に帰ってきた。しばらく経って、山田君から電話がかかってきて「今日、太郎を見た?」と聞かれて)

a. 太郎はさっき、居酒屋で酒を{飲んでいたよ/*飲んだよ}。

b. 타로오논 아까 술집에서 술을 {마시고 있었어/마셨어}.

(Talooneun akka suljibeseo suleul {masigo isseosseo/masyeosseo}.)

(32)は「太郎が居酒屋で酒を飲む」という動き全体を捉えているわけではなく、「飲んでいる」状態の一部だけ捉えている。話者が捉えている発話時以前の状態は[認識想定区間]となり、その状態が発話時まで持続しているかどうかは非明示的である。先にも触れたように、「飲んだ」が不自然なのは「飲んでいない」状態と「飲んでいる」状態との切り替えの時点が発話時以前であることを表わしており、「完了持続性」を有していないからであろう。それに対し、韓国語の「eoss」は、「完了持続性」を保持しており、発話時以前の[認識想定区間]を表わすことができる。(33)(34)は発話時直前の状態を表わす文であるが、(32)と同様に、[認識想定区間]は発話時以前に位置づけられる。このため、「eoss」形が用いられるのである。

(33) (息子が部屋で勉強していると思い、おやつでもあげようとドアを開けたら、息子があわてて何かを隠している。母親が「今何してたの?」と聞くと)

a. 勉強{してたよ/*したよ}。

b. 공부{하고 있었어/했어}.

(gongbu {hago isseosseo/haesseo}.)

(34) (会社から帰ってきた夫が何回もベルを鳴らしても出て来ない。しばらく経った後で、妻がドアを開けると、夫から「何してた?」と聞かれて) (=4)

a. 食事の支度を{してたの/*したの}。

b. 식사 준비를 {하고 있었어요/했어요}.

(sigsa junbileul {hago isseosseyo/haesseoyo}.)

(33)(34)は「勉強している」「食事の支度をしている」状態がまだ終わっていないが、[認識想定区間]が発話時以前に位置づけられるため、「テイタ」が用いられている。(33)(34)も動きの変化時点の問題にしていなため、「した」とはいえない。一方、韓国語は、動きの変化時点とは関係なく、話者の[認識想定区間]が発話時以前であれば、「eoss」が用いられる。つまり、[認識想定区間]だけを取り出してその状態が完了したように言い表すことができるのである。「eoss」の「完了持続性」は(3

5)のような複文においても見られる。

(35)a.先生が講義を{していらっしゃった/*なさった}が、ある学生が手を上げて質問した。

b.선생님께서 강의를 {하고 계셨는데/하셨는데}, 어떤 학생이 손을 들어 질문했다.

(seonsaengnimkkeseo ganguileul [hago gyesyeossneunde/hasyeossneunde], eotteon hagsaengi soneul deuleo jilmunhaessda.)

(35a)の「なさった」は文の結束性^{*11}からすると、不自然である。前件「先生が講義をする」と後件「ある学生が手を上げて質問する」が同時関係を成すためには、状態化形式にしなければならないが、「タ」は「完了持続性」を有していないことから、このような同時関係を示しにくいようである。一方、韓国語の「eoss」は「完了持続性」を有しており、まったく問題なく用いられる。このように考えると、中世末期日本語では、「タ」形で同時関係を成すような表現が許容されたのではないかと推定される。(36)(37)を見られたい^{*12}。

(36) 獅子王の寝入った辺に、あまたの鼠どもが徘徊して走り廻ったが、ある鼠獅子王の上に飛び上がった時、獅子王これにおびえて眼を覚いて、かの鼠を掴うで宙にさし上げた。(『天草版伊曾保物語』 p.451:20 - p.452:3)

(37) ある百姓子を大勢持ったが、その子供の中が不和で、ややもすれば喧嘩・口論をしてひしめくによって、その父、何とぞしてこれらが中を一味させたいと、(『天草版伊曾保物語』 p.491:14 - 17)

現代日本語では、(36)(37)の「走り廻った」「持った」は「走り廻っていた」「持っていた」にしなければ、同時関係を成すことなく、非文になってしまう。中世末期日本語と現代日本語のこのような相違は、「タ」の「完了持続性」の有無から生じるのでは

*11 この用語は庵(2001)から引いている。庵は、いくつかの文が全体として一つのテキストを作っているとき、その文連続には結束性があると言い、そのテキストは結束的であると述べている。

*12 大塚光信・来田隆 編(1999)『エソポのハプラス 本文と総索引』清文堂

ないだろうかと考えられる。安・福嶋(2001)は状態性の観点から、中世末期日本語の「タ」と現代韓国語の「eoss」との類似性を指摘しているが、(36)(37)のように、中世末期日本語の「タ」は、「テイタ」と同様に、過去の状態を表わすことがあったようで、文の結束性の観点からも現代韓国語の「eoss」との類似性が認められる^{*13}。

5. 現在・未来を表わす「eoss」

韓国語の過去形「eoss」は(38)(39)のように「go issda」「eo issda」と同様に、日本語の「テイル」形に対応して現在の状態を表わすことができる。

(38) (タご飯を食べているところ、友人から電話がかかってくる。「今、何やってるの?」と聞かれて)

a. ご飯{食べてるよ/*食べたよ}。

b. 밥 {먹고 있어/ 먹었어}.

(bab {meoggo isseo/meogeosseo}.)

(39) (太郎君の家に電話したら、母親が出て「太郎は図書館に行っている」という)

a. 太郎は今図書館に{行ってるよ/*行ったよ}。

b. 타로오는 지금 도서관에 {가 있어/ 갔어}.

(Taroounun cikum doseokwane {ga issda/gassda}.)

(38)は進行状態、(39)は結果状態を表わす文であるが、「eoss」形が可能である。先述したように、このことは「eoss」が「完了持続性」を保持しており、状態化形式として働いている傍証になると考えられる。状態化形式は現在と未来が同形で表わされることから、(40)(41)のような未来の状況を表わす文が成り立つ。

(40) (友達から遊びに来るという電話がかかってくる。「今何やっているの?」と聞かれて「ご飯を食べている」と答える。友達が「今ご飯食べているから、後で行く」としたら、「今来てもいい」といいながら)

a. *お前が来るころには、俺はご飯を食べ終わったよ。

*13 「タ」の「完了持続性」は近代小説の中でも確認できる(工藤(1994)、北澤(1999)参照)。このことについては稿を改めて論じたい。

b. 네가 올 무렵에는, 난 밥을 다 먹었어.

(nega ol mulyeobeneun, nan babeul da meogeosseo.)

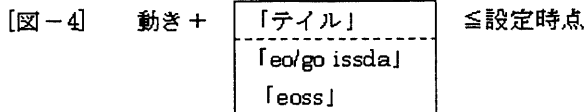
(41) (友達から明日の今頃、また遊びに来るといわれて)

a. *明日の今頃は、俺は図書館に行ったよ。

b. 내일 이맘때는, 난 도서관에 갔어.

(naeil imamttaeneun nan doseogwane gasseo.)

(40)(41)は未来の状況を表わす文であるが、「eoss」が用いられる。このことは「eoss」が一種の状態化形式になるからである。このような観点からすれば、日本語の「タ」は「完了持続性」を含んでいないため、(40)(41)のような未来の状況において用いられにくいのではないだろうかと考えられる。両言語において、出来事が設定時まで持続するためには状態化形式をとらなければならない。(40)は「食べ終わる」が状態化して「食べ終わっている」になって、その状態(効力)が設定時「お前が来るころ」まで持続することになる。また、(41)は「図書館に行く」が状態化して「図書館に行っている」になって、その状態が設定時「明日の今頃」まで持続することになる。この関係を図式で表わすと、[図-4]のようになる。



日本語の「タ」は「完了持続性」を有していないため、[図-4]のような関係ではなく、[動き+「タ」<設定時点]という関係になってしまい、設定時と重なることができない。それに対し、韓国語の「eoss」は「完了持続性」を保持しており、[図-4]のような関係が成り立つ。「eoss」が状態化形式として用いられるのは、この「完了持続性」を保持しているからだと考えられる。

6. 終わりに

以上、日本語と韓国語の状態化形式のテンスについて見てきた。現代日本語の「タ」は動きの変化時点が発話時以前(過去)であることを表わし、「テイル」は変化時点以後(のある時点)からの状態が発話時に持続していることを表わす。一方、韓国語の「eoss」は「完了持続性」を保持しており、「テイル」「テイタ」に対応できるなど、

状態化形式として働いていることが分かった。「完了持続性」の有無から、「タ」と「eoss」の相違が見られる。

また、韓国語の「eoss」は「eo issda」だけでなく、「go issda」にも対応する場合があり、特定の文脈において結果状態や進行状態を表わすことができる。一方、「go issda」は、言語活動を表わす動詞を除くと、基本的に動作パーフェクトのような抽象的な状態には用いられにくいようである。本稿では、「go issda」の動作パーフェクトは結果状態から派生した可能性が高いと推定した。

さらに、状態化形式は、通常現在と未来が同形で表わされるが、韓国語の「eoss」は「完了持続性」を保持していることから、「eo/go issda」と同様に、未来の状況も表わす場合がある。このことは日本語の主文末の「タ」が未来を表わしにくいこととは対照的である。このように、現代日本語の「タ」が「テアリ>タリ>タ」の変化を辿りながら「テアリ(>タリ)」の「完了持続性」を失い、主として過去テンスマーカとして働いているのに対し、現代韓国語の「eoss」は、中世韓国語の「eo isda」の「完了持続性」をまだある程度保持しており、現在・未来も表わすことができると考えられる。

参考文献

- 安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
- 安平鎬(2000)「結果相を表す表現と空間表現との共起関係—日韓対照を中心に」『空間表現と文法』くろしお出版
- 安平鎬(2001)「韓国語の「タ」:「hayss-ta (헛다) をめぐって」『「た」の言語学』ひつじ書房
- 安平鎬・福嶋健伸(2001)「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系—アスペクト形式の分布の偏りについて—」『東西言語文化の類型論』特別プロジェクト研究成果報告書
- 庵 功雄(2001)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 井上 優(2001)「現代日本語の「タ」」『「た」の言語学』ひつじ書房
- 井上 優・生越直樹(1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合—」『日本語科学』1 国立国語研究所
- 井上 優・生越直樹・木村英樹(2002)「テンス・アスペクトの対照研究」『対照言語学』東京大学出版会

- 岩崎 卓(2000)「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』
4月臨時増刊号 明治書院
- 大塚光信・来田隆 編(1999)『エソポのハブラス 本文と総索引』清文堂
- 奥田靖雄(1978)「アスペクトの研究をめぐって(上)(下)」『国語教育』53,54 むぎ書房
- 生越直樹(1997)「朝鮮語と日本語の過去形の使い方について」『日本語と外国語との対
照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語』下巻 国立国語研究所
- 北澤 尚(1999)「近代小説とアスペクト表現」『近代語研究』第十集 武蔵野書院
- 金水 敏(1994)「日本語の状態化形式の構造について」『国語学』178 国語学会
- 金水 敏(2000)「時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 金水 敏(2001)「テンスと情報」『文法と音声Ⅲ』くろしお出版
- 工藤真由美(1994)「蓮華寺では下宿を兼ねた」『国文学解釈と鑑賞』7月号 至文堂
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 杉本 武(2002)「「ている」形の解釈と動作主性について」『文藝言語研究(言語篇)』42
筑波大学 文芸・言語学系
- 高橋太郎(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』国立国語研究所
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 丹羽哲也(1996)「ル形とタ形のアスペクトとテンスー独立文と連体節ー」『人文研究』
(48-10) 大阪市立大学文学部
- 野村剛史(2004)「近世スタンダードの動詞のアスペクト」『月刊言語』4月号 大修館書
店
- 浜之上幸(1992)「現代朝鮮語の「結果相」=状態パーフェクト」『朝鮮学報』142 朝鮮学
会
- 福嶋健伸(2003)「中世末期日本語のテンス・アスペクト」筑波大学博士論文
- 許 宰碩(2004)「現代日本語の過去テンスについてー韓国語との対照の観点からー」『筑
波日本語研究』9 筑波大学日本語学研究室
- 堀江 薫(2003)「日本語と韓国語の認知言語学的対照研究」『日本語学』9月号 明治書
院
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 高永根(1990)「時制」『국어 연구 어디까지 왔나』동아출판사
- 高永根(1998)『中世國語의 時相과 敘法』塔出版社
- 김종태(1987)「15세기 국어의 「-아 잇-」의 결합어형에 대하여」『嶺南語文學』14 嶺
南語文學會
- 김차균(1999)『우리말의 시제 구조와 상 인식』태학사

- 南基心(1978) 『國語文法の 時制에 關한 研究』 塔出版社
- 박덕유(1998) 『國語의 動詞相 研究』 한국문화사
- 박영준(1998) 「형태소 ‘-었-’ 의 통시적 변천」 『한국어학』 8 한국어학회
- 서정수(1990) 『국어문법의 연구[I]』 한국문화사
- 서정수(1994) 『국어문법』 뿌리깊은 나무
- 송창선(2001) 「‘-었-’ 에 남아있는 ‘-어 있-’ 의 특성」 『語文學』 73 한국어문학회
- 송창선(2002) 「미래 상황에서 쓰이는 ‘었’ 의 기능」 『문학과 언어』 24 문학과언어학회
- 우형식(1995) 「‘-어 있’ 과 ‘-고 있’ 의 상적특성」 『牛岩語文論集』 5 釜山外大
- 李基甲(1981) 「15세기 국어의 상태 지속상과 그 변천」 『한글』 173 한글학회
- 李南淳(1986) 「‘에’ ‘에서’ 와 ‘-어 있다’ ‘-고 있다’」 『國語學』 16 國語學會
- 李南淳(1998) 『時制·相·敍法』 月印
- 李崇寧(1981) 『中世國語文法』 乙酉文化社
- 이재성(2001) 『한국어의 시제와 상』 국학자료원
- 鄭彦鶴(2002) 「‘-고 있다’ 構成의 文法化에 對한 通時的 研究」 『震壇學報』 94 震壇學會
- 정유진(1998) 「근대국어의 시제」 『근대국어 문법의 이해』 도서출판박이정
- 韓東完(1986) 「過去時制 ‘었’ 의 通時論的 考察」 『國語學』 15 國語學會
- 韓東完(1996) 『國語의 時制 研究』 國語學會
- 韓東完(1999) 「국어의 시제 범주와 상 범주의 교차 현상」 『西江人文論叢』 10 西江大學校
- 許 雄(1987) 『국어 때때김법의 변천사』 샘문화사

ホ ジェソク／人文社会科学研究科
(2005年8月1日 受理)